物學和歌式

よみかるあらいすぞ

五

和哥式様の事

一八雲抄にこれを一の体とあらはしゆるすしたがひ
もとゞ又いくさとなくぬ人もあるべきのようくとるもあり
上よりの中ゝもあるべきのとえとゝぬもあり

一八雲に仮名序にたゝんとくしなひはたらいい
ふもの家物とゝあるもの　ぢらきこそれも物きてよろこれん
わかハ弘べしとゝ　ぢひよりのとのゝゝんとをるいと
ろしぢいろん家とゝひえるもとらと物しくつゞく
きしされとこの乃紙面もぢてゞと仏性もあぐしげさ
きすよおもの物のとゝひゐてよろしくれの一つれば
かこの乃ひろさゝてひて物よかりろきおしゝきて
上よのかこのとろくるハ各別のりのしきよかこと
とろなゝ海べしよハうみハゝれあしきゝゝんと
ゝなむハ一とゝかハ中このとろやうもくん

はてゝ仮付くて。丸は自在なる人などハうくのごとし
初心なるべハつまよりかれのさ様とんぐ者もてて
ハもつやうまとりなりぐさうるべくれバ藝芸の者と
ハ古人のかゝの乃とりやうとくくこゝさらてうぐう
ハさやうにわくとうなる物さきやされどかゝとくさ
ぎびふけるのやうとゝとうさるもろくれハ
自然よりさきるかゝとやとゝうよ丸こさしか
ゝのとろやうもつぐざるハ人よとうけさるるし
一八雲抄中に八ゝ雲とるるれし近代ハ又ゝ雲とその初ろ
よわぐことろうくくくゝゝゆさらてこれとゝさること捨よ
て我んも初いなゝさうくくとくゝゝの魔しゝゝ
ゝ紙らくくんるべさるすしろくくもれハかゝとれ
とゝゝゝかゝの乃ゝ初とゝしうなゝゝるゝ
つゝて我紙のもく半竟かゝの乃ゝ初よりハ
うゝとなるさゝのあるゝとしかゝれとゝハかゝ乃

ゝ初よ又ゝぐ作ちゝとゝゝてかゝのと各別よなる故
よとろべさし
一
かゝのよ丸ゝ時代のゆ詠寄大概歌枕よゝ抄の日
かゝの八後拾遺などよゝの初し後川後百ゝの作ゝも
俗歌新長のゝのなど近来とるゆありと八ゝ後拾
よゝしゝろ丸技百ゝの作ゝも人よゝそうべき月作
ゝも人のゝあるゝのなとのゝれと笑ゆゝとれべさ
ゝや俗寄よ八近世ゝよゝ乃ゝも引用ゆるしゝゝ
ゝ比ゝ分ゝゝし撰集八万葉ゝ今後撰拾遺後拾遺ゝ
丸べさとし後川院百ゝ作ゝ拾ゝ初ゝ技ゝ百ゝ家ゝ
中初ゝ大江走房拾中初ゝ源四信ゝ拾ゝ兵衛遠源作 新
撰現大丈技ゝ拾ゝ拾大丈後拾ゝ近衛中初作
技位技ゝ拾ゝ散位技ゝ基後拾ゝ作後拾大ゝ大后
宮肥後一宮紀伊兼秋院河門世ゝ拾ゝ紙初の後八代百ゝ
乃作ゝの中ゝ拾ゝ作ゝとゝ拾ゝ作ゝあゝ

とし知られバ又家より後撰迄この作者又院門院
百首の中人よりてよろしこれより以後の作者
の歌ハ古歌とよろしくとし先たの統まりなし
めでたきひたるもくそさて又以定めの時代の作者の
歌なりバことひ代一代集の末新続古今の歌まで
もよろしきよし詠歌大概にみえたり

一 古寿乃よりやうの次第
一 井蛙抄（せいあ）頓阿法師之作 に云 新勅撰権中納言 定家卿作 詠歌大概 に古歌をと
りておもしろき歌を詠事五首の中に二句に及びても
くるしからずしげなし二句の上に三字五字これを
ゆるすと頓阿ぜに同すとれて古歌の詞を詠むを
る八会なし花とりて花を詠じ月と取花と詠も四
季の歌とりて恋雑の歌を詠し恋雑の歌をとりて
四季乃歌を詠ごとくのごとき時古歌をとれに経なし
以上詠歌大概に みな見えたり これ本歌をとるの事に量し本歌五句二十

字の中と三句ならずハあし〻 二句の上二字三字ハ四
字まで八ゆるも五字とハよろしからずとしさて又同じ
と取ちがえ詞と詠むとハ本歌の月の歌をとれて又月の
うたとよみ花の歌をとりて花の歌をよむハあしきこと
本歌の四季の歌を恋雑によりて本歌の恋雑の歌
を四季によりてよむべきしいふぞなれバ本歌の
花の歌をとりて花の歌のみ見ひくなきバをとしいひ
くるしからずして本歌ののはくなるとなるなれバあし〻
としされどもみることは歌に八本歌の花をとりて花を詠じ
恋をとりて恋をとることあいふ例もあり 例定家卿の歌
もあれどもこれ八上手の志わざにて初心の輩ゆるすまじ八
あらどぞ例 新拾遺 庭訓 に 定家卿作 に 花の歌をとりてもひょうらく
月をやうて月をよみたる八年老の志わざなるべし
春の歌をバ秋冬などにこもし恋の歌をバ雑や季の
歌などに出るもその歌をとれるよしとすゆるやう

よろしくなりとぞいひ出て下とも云

一本哥ハ三の句とハ今詠ずる哥の三四句によりて久しく本哥
の三四句ハ二句によりて下句の言葉とりてもやむ
和歌庭訓抄本哥の詞をあまりに多くとる事ハあるまじ
きなり二三句にてとりて下句に給と覚ゆる詞を二ツ三ツとれ
て今の哥の上下の句にちらし置べきにや侍らん又ハ
多くれハ一つの句をそのまゝおかずあまりの見なれたる人とおぼえ
と作る哥とも云ハ一つの句をそのまゝおかずいふに詞とと
かへて上句下句に置て其の哥なりけるさらん難や季やか
どもよむべしとぞ

一本哥とされる事さのみ少し一つにハ本哥の詞と各別
の趣によりなして上句下句にとる例有
古今 恋 本哥　　読人しらず
あそこ我やと人に問へんなかなかをとふ後の忘らるゝに
新古今 春　　右近中将良平
とひ来やと花をまちしを

萩花の忘れずとこの嶺のおのへをとことに秋ぞ来る山ぞ秋

一本哥のことばをとりて風情をかへたる哥
古今 恋 本哥　　読人しらず
さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治のハし姫
新古今 秋　　後京極
きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき独かも寝ん

一本哥の返歌の心をよめる哥　本哥贈答の体とよ
後拾遺集 本哥　　能因法師
心あらん人にミせバや津の国の難波わたりの春のけしきを
家集 春　　定家
春ごとの難波の春の景色よりもあわれなとこそおもひかれ

一本哥の心をとれながらも本哥とかハりて又我作意を
そへて各別になりたる哥
新古今 春 本哥　　大江千里
照もせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき
同 春　　定家卿
大空ハ梅の匂にかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

一 本歌の詞ひとつとれる歌

古今恋本歌　　　　読人不知

あかてこそおもはん中ハはなれなめそをたに後の忘れかたみに

新古今恋　　　　俊成卿

うきミこそ我にハつらくなりぬともなとか見し夜の忘れかたみハ

一 本歌の二句をとれる歌

古今雑本歌　　　　読人不知

いくよしもあらしわか身をなそもかく海人の刈藻におもひみたるゝ

同恋本歌　　　　同

よひよひに枕さためんかたもなしいかにねし夜か夢に見えけん

家集恋　　　　定家卿

さてもいく夜人のかるもを朝日よりまくらさためんかたもしられす

右本歌の詞の事ハ詠歌大概に委しく見えたり（?）

返歌の事

一 贈答ハ古くよりある事なり　歌をいかに贈る歌を本とし（?）

本歌の詞をとりて（?）返歌ハいかにもあるへし 他人の歌を

重んすへきこと也 古人なそらふへきことハ家よりうくる人の

歌乃返歌を見るにハかへす歌の下句にある詞を返歌

のかしらにおきてうつしよせし歌より下なる人ハさもあ

るましきとのよし

一 恋の歌乃返歌ハ先の人よりさらにそのおもひハまさ

らむと我もおもひあふなれとも又人ハいつはりをかれ

と我ハ真実なるよしなとといふやうにてしかるへし

古今恋

つゝめとも袖にたまらぬ白玉ハ人を見ぬめの涙なりけり　　安倍清行

返し　　　　小野小町

おろかなる涙そ袖に玉ハなす我ハせきあへす滝つせなれハ

袖にさへおつる白玉ハなミたかハ人のわたりてもそれハなと

なかるらん我ハせき川せのミならすおつるとくなれハ

同

玉となるなとハおもふまてこほるあれこし　　としゆき

つれくの源を洞川神のまぬまてあつまりもなう
なりいら
返し
洞こと和神ハひつる洞川ことなるとさう八神ん
神のくぬれてといふとさへてをかまて八教をれをも
しかもなるくなとうをのつくバ教ひべしとし
此等返事神のか扶なるこう法師ことくう
又くのとくやふといふことをれハさもかりうこをあれ
といふ神もあり
彭古今
六貳之信霊ようて信をるとさうて
行人ハ信くくも信者の霊井とのこハおりハさくなん
人貳之信
信返し
信者の松ハ生つともおりはとを天ち千年乃ち名れ慰さ
一反あつひむくしとしといふこをありこれハあつひといふこを八人
のにまねとらくもちろをくくもちろをあれ新大方
用ひて或八一句或八二字三字とくても用るるなし

後一条院長日行幸の時上東門院同行啓あるとして
法成寺入道
後一条院
その〻ち年ち和ん長日の月しるをもるゆくられ
此くへし
くりれを世の色をや長日世の月しるをもるゆくる沈
此ありつひむくしの神とて八雲出抄手本の抄和
よものせれをひ本井義の張各なをもも抄ら
むくく乃神ゆるくへし右乃張各とて勘世をへ
をくや
兼歌宮定後やうの事
兼歌の事も宮定の事も井の神ゆう
八ることハなるれど張やうのいつをひあることし
一所秘書耕を路宮定兼歌の時八神命を浦ゆを
出ものをくをうて井くをうをうをいてくをし兼日
の時八舎月ゆる成抄をて何時をてもと密教法しておる
ゆ行を世のをひなれハ宗教をつくへ雅云素容を射西

しかれども是ら狂言の目近付てありてかゝろうさあまりに
多年よりて当座舞もいく程なれ共おく見えとりさ
味なる事といふべき時に他人ハ用ひるやうにして楽
さる中におかしきなるゆゑに今ハ是よなり
ぬれバ是も抱く退座のかいてくろし思訳とかう
さうんぞんじめ当座の思ひとなりて心よく楽しく
むべきなりと云云

一 愚問賢注兼月の歌ハ目数あれバ殊に誂へてん約
とよく調べし当座ハ時分に無窮なる狂言ぞなき事ども
然ども其ぞ偽らん術各別なる人さまにあり候と云云

一 近来風雅当座の寿ハ先ずとろくとも歌にもあて
ともかくもなるべかりけりと云云

和寿稽古のこと　凡和寿みんなして芸古せんと思ふて才一なる
の志実ともさることを宗として師匠を求ておかふ
べしよき師匠とハ是乃口伝をもって談方によくいふ人

なり諺なるよりいづれも思ひ口伝ハあることなれども是さ
て和寿の為にハ志ともの事もロ伝あることとし志ら
まバ是の伝なきさ人ハ我がりして寿談といへども
皆をいひ侍り のよりて本術にあらぬ程むくのなり
ひある中にもとりに和寿ハ談さの思ひ何ぞなり
多のおもひハ知られど談さまうとぞさん人ハ寿乃作歌
を見よりしと忘へざるなるべし耳底絶よ寿の談さこの
口伝をとしのことにもあるしなすらひではならぬよきさ
よろし又会云の談方は伝とかゝ抱ハ家よとしさる寿と人の
さうといひさらとる時なくてハかゆりと思はれぬ抱しいう
さ後談うさの口伝いひてげきんといふ事ハならぬ抱と云云
さて又和寿に物てんぞさも人の先さやもとさやうに覚え
えて思ひよらぬれどいざりてハこゝさ道なれバ必退
座して心むるしより〳〵て志実ともとさいふと先とれ
べしと古乃先達のとしへられ侍るなるべしと記

と先実にとゞかぬあれバいづこまでもかぎりのこゆる事
あるをや後成恩乃祠に史和哥ハ大聖文殊の御智恵
よりおこれるものなりと云々 神代よりこのかた古人先
達の心をつくし言葉をとゞろしてつたへ傳ふにハかり
がたきなることにして只鍛錬もなくしてやすく〳〵と
えられんためならバされの人か綺ぜざらん古跡(こせき)とハ
聖賢に随(したがひ)て入道実雖(しといへども)雖退(しりぞく)河時成なるなどとかも全
言なりとて愚而賢注にもひかれたりされど又難
観衆記尼との心のいたれバ一向さの荒廃しさもハ
あらざる古人の詞に斎ハよむとのべたるにハあくまでよ
くよむとの心ざしとて云々 きされバよみてといふにハか
ぎりなき事なれどもをとしや世の功つもりで
るうしとぞるなきとおもハせかんしい見し侍れどこの乃
初学から退屈せん人の為にハせんかたなき事な
るべし又藝古に二のやうあり先歌とよみて

ゆゑ稽古するにおよばずよみさるにハなくともおもふ程
の藝古ハならひやもときたるべし大方のことまでハお
きこゆるぞ一首もよみ出でて人うたハたゞちあ
あらんとんざんハ藝古も又一かしねかさんで足して
ハならふべからずや熟思而賢注にもしかり
哥乃藝古ハ初に志ざしハ有ながらくるすハ人
にまかせハ人をもやなりんとおもひくらべて見えりと
つらぬ宗初学に多しくるしくあるまじきこと
しかより初学よりよみ出すハあるべき事にあらね
ば末もよみあハぬおもしろからずなる事功節となりて
まあて早下せぞかなきすまうらびんの行にするせて
いひつらねて人の批判を受べきし悦目抄(基俊作と云々)と云
初よみハ人の耳へも越ずかんとするきんとつか
ふべし早下してハせられぬなしとぞ云々
たゞし深く家の歌の私の執意のするにあらぬと

和哥字母のこと

くく古人のさしへ拾抄出の略記し
和哥の字と云よ付ては涯際なききとして法た
とふるひ詩書百家の書きもとくくきとんハ云
字の精微とハいひかくし されバ井蛙抄よ平中納言
惟輔卿云因定院殿（京極摂政太政大臣基忠公）作よ法たとふらひも
ろよいづれの古もとろかなりむとと思へども附よ発明
なるきとハ陰月のうちと和哥のたとし又九條殿下
兼実公の作よ文字乃字ハ涯際なけれども文字さ
バきハもあるべし 和哥乃字ハ定を云ふハきハじるべあ
ろすしきさと作られたるとしめし広きさ拙しなるくバ
和哥と熟吾せんと云ふて先定なきむとハさかにしほし
きうとい字よ千載集序よ作いたとはかぶるまとと云
よろしく小目かりよつきさふきの花とまおひたのそれ
日ノ乃崩のふきさのりとさとらふもあり然只
ふかのよ柱らあまり七文字の内とらてむをしてんよ
むかとどとのやうりせていひつくねるなるひくと云
又和哥殿割称俗世に京極入道中納言藤原為家卿へ
送られ作り一巻の中ろやまと言乃たハさく求め
ひろく法たよあしむと作るとは言葉よ依る謀
よ凡氏法頼乃きざさと深べきよあしむとくぐ大和言葉
出てから称せり抄よ付ていひ出せバりしされバ経論の
文と求めひろく詩賦の言とうつしとべきよあり故可然
の言自然の言なとと称せて深ぶるもいとくし違
家持れとき云られとりつておりへバ文字字ハいかにこ
とのやうよせう拙志なし バいづんかんとや云字よ
是頃居住乃来継の人ハよづ情性をよく吹繰しておの
を古集なとど熟吾とともるすハあるすでさやらん又仍
祢と字類ろとせんとせんるよハされ初より定字法字
ともへきとや各一首よとて用なしとやも文拙とところ
ろを覚えてよむへしとやもとりふきぐひハゆくべきるうの天

古今聞證法師文學法師とともにおさなくつどひて
たがひにうたをよみあはせんとしてまづ
ろざしをえらびをはりぬるのち
師のせつにとりて先生は淡路とんいへり出典翁
古今第五哥八作やうとおもへり
しかるに淡路のかたはらに
うとおぼされば哥八淡路やうき
ようき枝木八あれど家の作やうとおもへり
よりて作やうとおもへれば
つらつらしさて哥よりとぶきめれどのづからに
くさ書れどいろいろ
らのぶき集ども又八物語も作のさうぞくにおよぶ
ろべきしろうて
も初とおぼしきものの白作やうなるべし淡
まらうき書れどもあひ哥も作なるひぬれば

まれなる中にて人何事もくせに似て詮なきことなれば位
えらしらつの早きかでも志ざ海のあたりへしさを以て
よしとやなるにて人あるべき海にも深くさじかるべし
てよむべきこと也さて實人なとあらん歌にて宗旨有
つるむ歌となりもべからむ細く麁と云べからむ位
の歌にも優婆離の威義として仏をとらむや又西行詞
花今の歌まて古の歌陵夷せる浅深なくせる程の位
共なれとも女房さかりしよて一の雑とせるいゑをと
思弁してよくしなむべきことにて

和歌の詞乃事

一 詠歌大概定家卿作 詞以旧可用 詞不可出三代集先達之所用 新古今古人歌同可用之
とゝ 和歌の詞はいくらひもあるくらとなれるう
つくしき詞とりてつゞくべきしたくらとなれは
詞とあるべしくつくりいさしてハ深なるべしよって以
ときてハあるし其詞はいづれと用ゆるぞとらくべ

定家卿のおよそ詞以旧可用と云下乃中是に詞不可出三
三代集先達之所用新古今古人哥同可用之とえてこれ
よハ深きところありといふとも此大旨とりて所ハ和歌
の可用詞ハ古今集後撰集拾遺集之三代集之詞
と可用並に新古今集とも去し三代集以の哥の人
の歌なれば可用とし新古今とさしての歌にハ新
古今ハ定家卿当代の集しされバ当代の集にても古
人の詞なれば可用といふべし總して歌の詞ハ千万
無量にして三代集の外にも見用てその宜なき者
おもしといふとも定家卿のやうにまで量を定めてよハ
深きことあるよし進歩ならかしく注しの通り仍
今稽学の人歌を添をんと思ふ志ハあれどいひつゞく
べき詞をもさざれバといふ人あつさる人のためにかた
みも又ハ二句もとりやすくしてひかへとせん人にも三代集
むねをかれバ三代集の内大略を見るして初心の

便覧ともなる三代集ハ世乃流布のまゝにそとも〳〵の詞
んの案ハ不及撰歌さらに拔出せり

三代集詞寄　古今集　後撰集　拾遺集

一肩付之例

一八　春之部のうし　十夏　ア秋　フ冬　コ恋　夕旅　カ賀　哀傷
尺釈教　ネ神祇　長長歌　牛物名　非誹諧　定旋頭　別離別
雑八雑春　雑ナ雑夏　雑ア雑秋　雑フ雑冬　雑コ雑恋　雑夕雑旅　雑カ雑賀

いろは紀の中一句とる時ハ字細二句つけて
とる時ハ本哥それの詠捨也本哥と云事ハ四季の哥
と恋雑と称し恋雑とれて四季と称をくらし仍紀
本の其ましく又本哥の一首をとらんといふときハ本
出と書る事便ありべき為し

一古古今　後後撰　拾拾遺

一三一本哥の三句し　二三三句のうち　三ノ三し三句　五し五句　一句ハ本哥紀
いろは本哥の一二句を以三句目の歌ゆ句を云

まとりよる上下句ニ取ゲなかすれの法式也仍句
付とて句の取法とりくべき為し

○春

古八 春ごとに　古八 春の柳の　古八 春の物花　波又ハ紅香とも
古八 春ぞおもぞ　古八 春くることを　古八 春ぞおそき　古八 春くるれ
古八 春ハことも　古十 なかの中　古八 むことほや　古八 むのかげたち　古八 むなさき里
古八 花の名にて　古八 花の跡ぞも　古八 花のごと　古八 花しなどハ　古八 花と社とる
古八 花のちらく　古八 白ふ春べ　古八 色とも香とも知人ぞしる
古八 色かつて浅む居り　古八 色こそそこねやかくて　古八 にほふ又さくらも
古八 色よりも香こそあれ　古八 色もかも同じもの　古八 いざ桜ちれもおのれ
古八 今いく春しなかれバ　いそ立なりし礎かつむ　おのれといへれど
古八 いつ又もれとの風の吹らん　又ハ
後八 氣よりうそふむ柳

いづれを梅とわきて折まし
拾八ノ五 いつらハ後の春も社あれ
拾八一三 春くらて粧ふゆきハ
古八一二三 春の日乃光も知られ
後八一二 春雨のふり出て鳴鶯
古八一二 春霞色乃ちくさに
古廿ノ五 春のゝ山乃辺を恋つ
古八一二 春霞たてるやいづこ
古廷 春ざれハのべよそとく
古コノ五 春の初そなかめ暮つ
古八一二 春の色吹ぬかるゝぬ
拾八一二 春立といふバかりにや
池の辺なる咲まかり
拾カノ五 いつとも見え春立なん
古八一三 春やとき花や遅き
古七 春霞なにかくれ
拾雑八三 春のゝ野辺に求むと
後八一三ノ五 春雨の降るはあめ
古廿二ノ五 春霞たちてく君が
古ゴ一三 春霞かすみ川や
古八ノ五 春ハ我かもありと思ハバ
古八二ノ五 春の山辺に桜さくよハ
古牛ノ九 春の来てや後さかん
後八二ノ五 春ごとに暮れハ桜川
いもゝ梅香も咲なん
後八一二三 春ハさかり花とさきと
古ワノ九 春の霞に花をさかせる
拾コ一三 春の始をまちし
古八一三 春霞たつさの山
後八一二三 春の沢のかをの文
古八二ノ五 春来れ立つらん
拾廿一二三 春の始ハられけれ
後八一三 春の光かげもかくに
拾八一二 春の粧おしむ知ぬ
拾八一二 春立といふ許りにや
古コ二ノ五 春雨のふるひとおれバ
古八二三 春の山辺にまりなん
古八一三 春きぬと人ハいへども
古八二ノ五 春霞立を捨てゆく
拾牛三 春風の色やかれバ
古八二三 春の山辺にすむ人も
古オ二三 花の散りにそおぢて
古八一二 花の色ハうつりにけり
古八一三 花の香をやまひしき
後八一二三 花見てこそ帰る
古八二三 花の下ハなるたづ
拾雑八ノ五 花さそ宿の香とおりなれ
古八ノ五 ひとてくれ春ぞかき
古八一三 春くそバ花とやさらん
古八一三 春の日乃光もあくろ
古八二三 春霞なる流さらん梅
古八一三 春雨のふるハなにらろ
古八二ノ三 春知るもむるさくらむ
拾コ二ノ五 春の田とくはもくぞ
後八ノ五 ものをそ我ハさかむ
拾八一三 ものの木も枝しもなく
拾八一三 ものの木も今ハさかりの色
古八ノ五 むぞ背なる花ひろ
後アノ五 ものゝやいくよ咲らん
古八二三 ものの色となる花ハ
古八二ノ五 春の夜出て月の梢
古八一三 春のさる花乃衣
古八一三 春くそどもも白妙
古八一三 春くればかみかおり
古コ一三 春くて八流るとおり
後八ノ五 春霞もと風に任せじ
古八一三 むことこそくらむ今
古八ノ五 むとされ人物をも思
拾八一二三 ひとと捨てかつや
後八一二三 むらんとしも思ふ
後八一二三 ものゝ後まさりそ
古八一二 ものの色ハさて一さかり

古八二五
くもゐにてゆくへしらぬ人の為
於八二五
うぐひすのゆくへしらぬ人の為
後八二三
はるかぜの柳まゆ
於雜八二五
はるかぜの柳まゆ
後八二三
はるかぜ柳まゆ
古八二三
春の夜ぬるまとうたて
後八二五
うぐひすのなきてふなる
於雜八二三
はるかぜのうぐひす
古廿二三
世と言ふしなきまびん
古八二五
よわてもこんこぬ人の為
後八二三
春雨をいとぎりぎりぬ
於八二三
ものとうものどかうつる
於八二三
子はもとのべなとちり

古八二三
なるよと柳まゆひまとは
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
於八二三
柳の糸をぬるまゆ
古八二五
なるよと柳まゆひまとは
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古八二五
柳ともいはぬ雪降て
於八二三
柳むすぼれてなびく
古八二三
柳むすぼれともみしぬ
後八二三
柳むすぼれてなびく
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
古八二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
古八二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ
古八二三
柳むすぼれてなびく
後八二三
柳の糸をぬるまゆ
古廿二五
柳の糸をぬるまゆ

古八ノ五 神〻乃緒ぞ白浪りける
古八ノ二 あるれくらそやてそ花の
古八ノ三 後八ノ三 あくるはたるむと
古八ノ五 わてぐさんとるるやと 拾
後八ノ五 おのもつるくもむ法ゆて
於八ノ五 ふひ法とぬそれのうれ
古コノ五 芝めのらうよしそ
於フノ五 山ろ凡よそれぞちるる
古八ノ五 ふよ心芝もなくゆより
古八ノ三 山ふ流ぞさくるぞれ
於八ノ五 山の拾ハそろひより
古八ノ二 やゝらく拾のむ長
於オノ三 世ぐそれハ芝ふ法り
於八ノ三 のへの乃歳ハうらも
古八ノ三 わくくハ情ぐふもあるむ
古八ノ五 芝ても水の波と社かれむ
後八ノ五 おの〻乃拾わてぐさん
於雅八ノ五 ふひやるそや芝とそ法
於八ノ三 くらあのるそそ教む
後八ノ三 山田乃沢ふぐるむと
於コノ三 山べいとくらむ
於八ノ三 山ぐそれなるそ〻む
於八ノ三 やくふあやるひむ
後八ノ三 の〻ふ拾と川ふ拾
於八ノ三 のへそれハ方ふ摘乃
古八ノ三 わつれハ神そ白 拾
後八ノ三 ふるハめやれ拾芝
於雅八ノ三 ゆるらむそそ寸
古フノ三 ふくゝ山乃芝ぐのふ
古八ノ三 芝ふ芝ゆゝ拾む
後八ノ三 ふそゝふみふる拾
後八ノ三 山拾咲ぬるそれそ
古八ノ三 山拾ふるくゝふれハ
古雅八ノ三 らふるそのむいろ衣
古八ノ三 山乃ふ拾ふきま芝

古ク二三 やどふ先さくむ乃む
後八ノ五 拾のまそそ川ハそ乃
後八ノ五 ふるくそくらうのくふハ
古八ノ五 行人のうふあやそれ乃
古八ノ五 乃ふそそ拾ぐゝるそめ
後八ノ五 ゆゝ芝ぐゝるそ芝の乃乃む
古八ノ五 そそとやいそんとふ拾
古八ノ五 ふとのそ芝むふれそ
於雅八ノ三 木のまそるちくる芝
後サノ五 くくら芝む芝ふるど
後八ノ五 拾ふそれる芝ふ拾
古六ノ六 青拾とくいそふるて
古ク二三 山ろくもと芝乃ふもそ
後コノ五 よふふくゝ人芝の芝
於八ノ五 ふくそ行とふ芝乃声
於八ノ二 松のふまふくふひそ
於八ノ三 ふ雪ふそ芝ふひ乃
古八ノ三 芝のふハ乃ふゝとそて
古八ノ三 ふそとやいそんとふ拾
古八ノ三 このめも芝乃芝ふれハ
後八ノ三 このめそそてもねどふ
於八ノ三 ひ芝ふ乃ぐふ芝
古八ノ三 拾ふもわぐ芝ふは
後八ノ三 青拾の乃ふふて
後三ノ五 山ふ乃やゝのふふも
於八ノ五 行ゝ拾ハ芝の声
古八ノ五 行ゝ拾もふ乃ひ芝
後八ノ三 ふの山乃拾芝
於七 二芝二芝ふ芝ふ
古八ノ三 衣芝ふ法ごふ芝
於八ノ五 ふれて白ふむ拾
古八ノ三 ふぐふ法くそふそし
古八ノ三 拾法ぐふふや芝
於八ノ五 拾ふくゝそふ法ふ
古八ノ五 ふと拾て芝ぐふ
於八ノ二 青御乃ふぐふ芝

古廿 あかりのむ さつき山 九十

古十に五 妹と我ぬる床夜乃むせ

拾十二 いつくろまろそ行ん 時鳥

古十に五 まきとくれて独さくらんむ 拾

古十三 並葉乃ゆきり以来ぬ

古十二 時鳥川こゑきあハ

後十に五 時鳥とやらぐひとほと

拾雑十三 時鳥うちふうき禄乃

拾雑九に五 千年の森いつ迄

古ア三 川风の涼しくもあるか

後十に五 うちそそ我ひめ出てふか

拾十に五 恆ねもこゝに鳴る卯むせ

古十 ゆかそよ鳴

古十三 今更よ出くるれ 時鳥

後十三 色ろ夜むそらが夜よ

古十に五 むね夜やとかうらん

拾号三 時鳥待ぐうなけく时声

古十二 時鳥我もさこしを

後十三に 時鳥ぬねなかりしに

後十三 時鳥きみうらき禄ハ

拾廿二三 千年の秋よ逢くれ

後十に五 恆ねもこゝよ咲る卯むせ

拾十二三 恆ねや妻とへぐらん

拾廿三 うつゝ次の雨をそれ

古十三 いつの間に五月きぬ

時鳥 古十二三 いまさら旅なる時鳥

古二三三 ハかなくも雨ら方夜よ

後三三 並谷の上かれかさ

古二二三 時鳥なくやさ川さ

古十三に 時鳥なく一こゑ今

拾十三 時鳥待よつぞや

拾長 営と秋よ捻ひつ

後十二三 我宿ゆかし桜子

拾長 夕やり火のくゆらん

古十に五 うら我よりむてそ鳴 時鳥

拾十三 秋祭る宿の卯花

拾十三 神祭るうづきに咲る

古八二に 立ひ乃うしお爪さゝ

拾雑十に五 うちれ時よ名谷おほしも 時鳥

後十二三 声をゆくうを見嫁の

古十に五 なまと時鳥我得なうん

古長 夜ハうつせもなきにし

後十三四 夜むしのこゝとこ捨て

後十三に 夜出のとより帰まる出ひ

古十三 夜半中あつき人や入まん

古に五 昔の人の袖のかぞ踊

古十三に うのむ乃うき世のあり

古十三 くるゝとくれハ明ぬる 夜秋

拾十に五 よ深く明ん我と待る 時鳥

拾表二三 待まくと鳴郭公

時鳥 拾二二三 おきてさそて照月か

古十二三 なかゞ鳴実れ雨まぞあれハ 時鳥

後十に五 夜露の葉のこ我まべ

古十三 夜と秋と行くに完

後十三に 夜の松乃きゝそね夜

拾十に五 夜さゝ深のとこゆる行む 改雪

拾二に五 夜のよ流る下ふのお流

後八三 拾むも私ハこなれ無

古廿二三 はる五月の涼ゆきの

後八二三 雲むゆすふ秋をし 時鳥

拾十一三 よそにほひ菖蒲草

古八三 袖ひちて結びし水

後十二三 妻恋ゆかし郭公

拾十に五 夜の恆ねよ當ぞて鳴

拾十三 夜よ社咲かり紅 花

古二三 夜出のことゝ泣う

古十二三 夜の一夜ふたよと逢

古二二 夜ゝしのて川の糸

古二三に 夜哀さもくや人の

拾十に五 おくれぬ五月雨

拾長 夢の営とあつめて

後ア二三 雲のよう出てく

後コ三三 くるぬのあかりかくれ
於十ノ五 大和撫子くれなゐ色は
古十ノ五 ふかきかいろつゆこなるん
古十ノ五 おくのしもかれてきつん
古十 三 おくさ青なぎ〜ぬるを
於十ノ五 後コ三三 秋の宮軒のあ波
於十ノ五 後コ三三 夜ふくるきりふかも有ハ 猶よりるうつをこ
於十ノ五 し五月雨よ彩方情こそ 古十三 こそその夜ふかしせ
於十二三 このたくやこふとしたひ 古十ノ五 声ふりこて〜ひ郭公
於コ三三 弱もとをめぬあやめぐさ 古十三 秋ちか〜ぬ八ぬよりり
於十ノ五 菖蒲の芳ハ庭の上て 於十ノ五 菖蒲の芳ハ庭の上て
古ホ三 さひしらふ夏八人ま孫 古十三 芳のねハの結て
古ラ三 青こ八ひもうなん 於十ノ五 あ千ぬしてよ田
於十三 五月雨まなかぬ頃そ 古十三 五月雨の中もとろ
古十三 五月まつ山ちこ〜ん 古十三 五月まつ山ちこ〜ん

後コ三三 大和撫子ろ〜のとき面
古十ノ五 ふかきかいろつゆこなるん
古十三 やどりせ〜ひちかか
於十三 二夢と寄とハ夢ハ
於十三 撫子の宮軒のあ波
後コ三三 猶よりるうつをこ
古十三 こそその夜ふかしせ
古十ノ五 声ふりこて〜ひ郭公
古十三 秋ちか〜ぬ八ぬよりり
於十ノ五 菖蒲の芳ハ庭の上て
於十三 五月雨まなかぬ頃そ
古十三 五月雨の中もとろ
古十三 五月まつ山ちこ〜ん

古十三 寄ちかりかくく
古十三 山ひかちとつてん
古コ三三 宵よりまとぶつやひ
後コ三三 古ハ乃大和撫子こ
古コ三三 こぐ〜ひてひかち
古十三 夢ハ〜て洞ふ〜ぬ
後十三 本頃て五月雨ひ
後十三 秋近ふ交てひハ
後コ三三 芳のねハの結て
於十ノ五 あ千ぬしてよ田
古十三 五月雨の中もとろ
古十三 五月まつ山ちこ〜ん

古十三 五月雨よ和かりひとまハ
後十三 五月雨よなかぬ頃そ
於十三 こふぬぞ〜ぬ頃そ
後コ三三 こ〜とろつこ〜のう〜こ〜ひ
古十ノ五 ちでのこ〜こ〜ぬ
於コ三三 人ごとハ夕ひのくさの
於十三 ひり所ハ家ありひて

後十三 五月雨近ふ交てひハ
後コ三三 ひりの社早苗ひ〜ろ
後十一 結ぶの交ひまひ
於熟十三 人まひ〜ぬ八ぬ
古十三 人まひ山ひ〜ぬ
於熟十三 ひり宣とこ〜ひ

於十三 五月雨ひ〜ろ〜ハ〜山
古ア三 ひり社早苗ひ〜ろ
於熟十三 人まひ〜ぬ八ぬ
古十三 人まひ山ひ〜ぬ
於熟十三 ひり宣とこ〜ひ

古十三 せこの打ハ〜ひ〜し

○秋

古ア いおぐこの家ま 古コ いおバのそ〜を 古タ いて〜ひもちぐのこ〜 古ア 月のこ〜ひ
古ア こ〜ひ〜てよ 古 さ〜ひあこ〜ひ 古ア ひこ〜ひ 古ア 月のあ
古ア ひぬる〜ひ〜 古ア 虫のあこ〜ひ 古ア こ〜ひ〜ひ 古ア くく秋ど
古コ おこ〜こ〜ひ 古ア て〜ひ〜ひ 古ア お紫ひ〜ひ 古ア お紫ひ〜ひ

秋ハなのみを　秋くるゝ　あまてる月　秋ハいとゝ
秋の初ゝ　秋さわぐ　池べよりそくさ
いなづまの光の名ゝも　今やらん千月の名
いく〳〵ハ秋のもしてふよ　いなづまの光をの名ゝ
稲葉そよぎて秋ぬの吹　名ゝくる秋の菊とは
いくらハく歳ぐら秋の　むかしなつかしつあきハ
初秋ぐりの三ぐつん　萩ゝむらくんとの
もゝそちゝめわさハ拾や　初ゝ今ぞさこもなる
くゝさハ雲ゝよりなんど　むかをよりしきく
秋ハ尺ゝ　萩の名葉もこゝろ
くゝぐゝの笠山の八月　初ふばりの袖ぬよ
萩の五葉も色ゝ　初ゝ
萩の五葉ハ先ゝ　萩の下ばの色と秋ゝ

もてふ蝶とおつ見ハ
庭も色も秋のくらゝ
稲ゝくゝの秋のとりん
ゝのよと思きとゝ
ちよ出て拾ゝ秋とゝ
年よりてこひ流ゝ色と
年の涙ゝ一秋ゝ
萩ゝハ情ゝ秋萩
とのゝ花のゝ知ゝや
蛍ゝと命とゝのむ
玉てハゝゝくゝの秋ゝ
とゝやゝのゝ

白ゝ秋のむしのハ
物ゝとゝ
白ゝ秋の初なゝ
庭の秋萩ゝ
ちよもゝ出とゝ
ちよ出て拾ゝ秋とゝ
年ゝ流ゝ
萩ゝ情ゝ秋の初なゝ
とゝ白ゝハ玉なゝ
蛍ゝ命ゝ
玉ゝ
とゝ白ゝ玉なゝ
玉ゝ
とゝ白ゝ玉ゝ

とくゝふるはさつゝ
とぐ秋山の紅葉とそ
ぬさとしけつゝ衣
家衣ひつゝ
家ゝひとつの秋とみはや
我ハ家ゝ秋も
我家ゝ
うつてひとつ
うの花の秋とうと
丁と我ひて秋とつげ
丁の明ぬ
うゝ

とゝ家ゝ
ふく秋の
我ゝとの
我ゝひてい
家伝やゝ
ゆゝハ秋中
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
丁人の
丁ゝ
うゝ
秋ハ
已ゝ
我家の
我家
別ちゝ
我ていの
丁人の
丁ゝ
うゝ
うの
うゝ

ゝ
ゝ
ゝ

松サ 又 秋ぞ恋しき
古キ 秋の夜の世秋の山の
後ア 秋の梢乃ゑもうつぬ
松サ 秋ハ浮世のおうやり
後ア 秋ハなき物を
後ア つゝぬき毎ぬ秋ぞ
松サ 秋の梢もうつろ
後ハ 秋の梢もやさらん
古ア 秋ぞ
古ア 秋りらゝと
古ア 秋
後コ 秋
松サ 秋と表
後コ 秋
後ア 秋の
松サ 秋ハ
後ア 秋ハなき
後コ 秋の
後ア 秋
後コ 秋
古ア 秋
後ア 秋
つゝぬき
後ア 秋
古ア 秋
古ア 秋
後コ 秋
古ア 秋
古ア 秋
後コ 秋
古ア 秋
後コ 秋
古ア 秋
後コ

ちアー五　ふるさとはやうらん
ちアー五　草村とゝ虫のうらぶれば
後アー五　うる秋ゝとよりくゝ
後アー五　草のの宿りよ秋ぞ
ちコー五　山ゝうゝ月の出てゝ
ちアー二　山田りる秋のうら
ちアー五　山の陰をゝれバうら
ちリー二　山田の稲のゝゝ
ちサー二　ちぐさも月のうゝ
後コー五　ゝゝ秋ぞ
ちネー五　松むしの声ゝ
ちアー五　ゝゝ

後アー二　草の葉ぬく白玉と
ちニー二　ゝ野と見てわ丁の
松コー五　草ゝ
後アー五　くれて
ちアー五　山ゝ
ちアー五　山のこのハのゝ
ちアー二　山ゝ
ちアー二　山の陰ゝ
ちコー二　山田の稲ゝ
後コー三　秋ぞ
ちアー二　松ゝ秋風
後コー五　松の声ゝ

ちアー二　草も本もゝ
後アー二　ゝ
後アー二　くれて
ちコー二　山のこのハのゝ
ちアー二　山ゝ
雜アー二　山田の稲ゝ
ちコー二　山ゝ
後コー二　松ゝ
後アー二　松の移声ゝ
松アー五　ゝの今ゝ
ちアー二　吹ゝ

ちコー二　吹ゝ草の葉ぬく白玉と
後ハー二　本ゝ
後アー五　ゝ秋の
ちアー五　ゝ
後アー五　ゝ
ちアー五　ゝ
ちアー二　ゝ
ちアー二　ゝ
ちアー二　ゝ
後アー二　ゝ
ちアー二　ゝ
ちアー二　ゝ
ちアー二　ゝ
後アー二　ゝ
ちアー二　ゝ
後アー二　ゝ
ちアー二　ゝ
後ア

後ア一二　秋のくさぶかき花ゆゑ
後ア二二　秋はなびきさぶ時なれど
後ア宝五　秋風かくとなきこせ
ちア宝五　秋のこのはとうたゆん
ちア宝五　秋雁よのこゑうくる
於雑ア宝五　後ちぐ物ゆしもの
ちア宝五　秋はるくのひうて有る
ちコ一二　秋といへはうてもてゆし
ちコ宝五　秋の夕はあやうう
後ア一二　秋ぐうよ友さとせる
ちア宝五　秋はは跡とうん人の為
後コ一二　秋風のかくようても
於コ一二　秋のふるもの花ゆゑ
ちア二二　秋くてとゑ俺一月
ちア一二　秋萩ようひきこれば
ちア宝五　秋よはあくせ物ろひ
後ア宝五　秋の林よ移ろくめ
於雑ア宝五　秋雁サ三　秋雁ようひくとの
ちア一二　秋風の吹ゆ一月う
ちコ一二　秋風のかさと吹ぬる
ちコ一二　秋のあはのはてゆし
於コ一二　秋風のかくようても
後ア一二　秋萩のうなかさと
ちア一二　秋立て我ろ物ねど
於ア一二　秋のふるもはぐひね
ちア一二　秋萩も立ぬれば
後ア一二　秋のかさやうん
後ア一二　秋萩のうなかさと
於ア一二　秋のよれ去さひ
於サ二二　秋ゆゑはは世ゆど
後ア一二　秋雁ようあるとよ
後ア一二　秋風よ浪やうん
後ア一二　秋雁ようひくせは
於コ一二　秋雁の話ぬ物の
ちコ一二　秋風ようさ寺琴
後ア三二　秋ようるうの浪と
ちコ一二　秋風ようひく後ぐ
ちア一二　秋萩も立ぬれば
後ア一二　秋のかさやうん
後ア一二　秋萩のうなかさと
ちア一二　秋のよれ去さひ
於サ二二　秋ゆゑはは世ゆど
後ア一二　秋雁ようあるとよ

ちア二二　秋ゆゑさとやさうさ見
ちア宝五　秋くうよひ公雁うる
ちア宝五　秋はかくしもかようる
ちア宝五　秋はきくれ立物をう
ちア宝五　秋のこのはのられ物ろう
ちア一二　秋のうやどうはぐし
於ア一二　秋山のあしのうるを
ちア一二　秋のこのはのうるを
ちア一二　秋萩とぐうるせて
於勅ア一二　秋風ようひるはは
後ア一二　秋萩とうどうるせの
ちコ二二　秋田うるてうこうねど
後ア一二　秋のかはのうるを
於ア一二　秋風の打吹ゆるよ
後ア一二　秋のくふ秋ようの
於コ一二　秋のかはのうるを
於表二二　秋の秋風のうるうれ
ちア一二　秋のくよ表なうる襲の
於ア宝五　秋風ようはうはは
ちア一二　秋雁ようはうはは
於ア一二　秋のこのはのねさと義
於ア一二　秋風よ秋のうるうを
於ア一二　秋萩のうるうるを
後ア一二　秋萩のうるうるを
於ア一二　秋風のうるうるを
ちア一二　秋のこのはのねさと
後ア一二　天川流れかさ
後ア一二　天川宝ゆと後の
於ア一二　天川ゆゑの後ろれ
後ア一二　天川来はあせのん
於ア一二　秋風の打吹ゆるよ
ちア一二　秋風よあくせ物ねど
於ア一二　秋のかはのうるを
於ア一二　秋風のくふ秋ようの
於表二二　秋の秋風のうるうれ
於ア一二　秋の草のうるうれ
ちコ二二　秋萩のうるうるを
後ア二二　秋風の吹ゆるれを
後ア一二　天川水場るうん
後ア一二　天川下ゆと後の
ちア一二　天川流れかさ
後ア一二　天川宝ゆと後の
於ア一二　天川ゆゑの後ろれ
後ア一二　天川来はあせのん

秋の歌と紙と紀のあ
秋の世界のうつるなり
あかるきを見もてとき
有明のの月はみなが
あしたゝゝ秋ぞふる
有明の月のあるつも
二人つゝゝ
あまの川秋ぞ
さかの川雲立ちし
ゝの山を初雲の
さゝ山のいろの
さゝらの声

あはれさうるひ
秋きゝ雲分きさう
鶴ひとあるる白雲を
ゆゑ限は秋ぞとゝん
鶴の羽の風は秋涼し
ゆゑも知とゆゝしは
天雲よりはりうの
金剛山の雲のゝ
秋萩ゝれあるゆ
さをしかの妻あるさ
さゝらの山のいつてのゝ
さゝらの声

天川原の波
天川波ぬ人丹
秋の月山ゝあるて照
秋の沢藤ゆ
秋の歌もゝの
あはれ
天のと渡る月
鶴ゝく
さゝらの声
雲立て
蓮ゆゝ
萩

雲立ゆ
菊の白雲
雲を舟出
ゆゝの人の秋
ゝやゝのゝ秋萩
ゝと秋ぬ
岩の紫は
下くゝ
鹿立ゝ
ゝゝゝ
鹿の鳴
白雲

雲立ゆ
雲は
雲立ゆ
雲の
雲の
雲の

白露とおもはぬくとや　古牛二ウ
白露のとる草葉も　古コ二ウ
白露とおもはぬまでに　古ハ三ウ
白露の玉とハ知らぬ　古コ二ウ
おもかゝ分ぬ色ぞ乃　古ア二三
おもかゝ乃ぬ色ぞ乃　古ア二三
おもかゝ乃ぬ色ぞ乃　古ア二三
おもかゝ乃

友まどハせる千鳥哉
年ハくれぬあるとしぬべし
送り迎ふと何いそく洲
我衣手ハ雪ふりつゝ
ふの雪となるぞ侘しき
れ物とのゝ濃ぢ染
川風さゆ衣うせやま
くるしもぐるとそ
物とさむゝ独寝て世ハ
旅なるはしも雪の降ん
えらむ乃友くるハ
流てやきゝ月ぬゝ
ふとゝのハゞ
ちゝ紅ふる神世乃
我も思ふ事ぬぎ
神世乃もぐれ降
神世乃もぐれて
くれぬと侘と雪の
燒乃新よ入れる白雪
門風さゝ千鳥
ゐのゝとてきらし
旅の涉ひも有ハ
紅の紅葉のゝ
流てくるおぼゝれハ
年ふさ乃て雪と侘
玉川も雪ゝ
我くる繁ふ年を
神世乃社の
素立明る朝雲月
りさゝし雪降
鶴のよゝ玉ゝ乃
ゐのゝ山ふ雪降し
ゐもゝあてふ侍
年ふ乃ゝ降雪ハ
紅ゝ笑てゆハ乃ゝ
湖さゝへ河毎ふ

ふよゝみる夕ちとり
ゝ物ゝ久ゝ降動ゝ雪ハ
蓑笠衣とゝ身ゝ
山雪ハゝて冴さ侍
山ゝさゝりもぐゝれど
山のゝ雪も降物ゝれ
ゝ乃新雪と表とゝ
今朝乃晨ゝ有ハ
ゝりゝ降ゝ実ゝ
ふるゝ雪乃まゝく叶ゝ
降白ゆゝの下ゝゝ
花ゝ乃ゝ
湖のゝちゝ雪のよハ
浦ゝゝく降ゝる雪ハ
雪のゝ有侍
ゝぐれゝゝ世ゝ雪の
山のゝ降ゝれ侍ゝ雪
山ゝ乃ゝ降ゝ
ゝ乃ゝ降ゝ
ゝ乃ゝ降ゝ
ゝ降ゝ雪の侍ゝ白雪
降雪ハゝて侍ゝ
降雪ハゝて侍ゝ
降ゝ乃ゝ降ゝ
村ゝゝゆゝ冬ゝ芝の
井路の雪ゝとゝてゝ
くりゝもゝゝゝ行ゝ
山ゝ乃ゝ降ゝ
山の白雪侍ゝ
山の白雪ふゝゝて
松の葉ゝゝれる雪の
ゝぬゝゝゝ又ゝ降ゝ
降初て冬侍雪ゝ
降雪のゝぬゝゝ
ふゝゝて来ゝ
ゝ乃ゝ降ゝ年の雪ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]